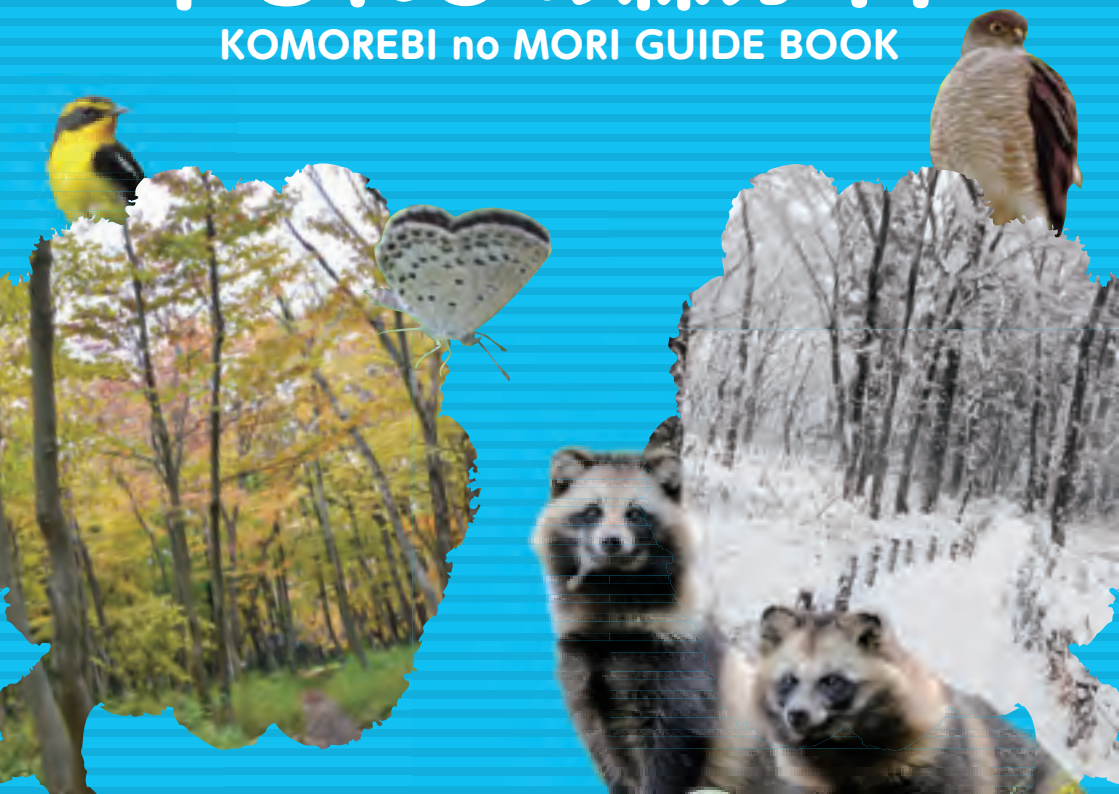




木もれびの森ガイド

KOMOREBI no MORI GUIDE BOOK



この「木もれびの森ガイド」は、多くの方々に木もれびの森の魅力を知っていただくことで、木もれびの森の良好な保全につなげていきたいと考え、特定非営利活動法人相模原こもれびと市が協力して作成したガイドブックです。このガイドブックを手にとられた皆様が、木もれびの森に興味を持ち、理解を深め、大切にすゝる気持ちを抱いていただけたなら幸いです。

相模原市水みどり環境課

木もれびの森ガイド 目次

木もれびの森はどこにあるの？	1
どうしてここに森があるのでしょうか？	2
森の移りかわり	4
森を守るにはどうしたらいいのでしょうか？	6
木もれびの森の保全活動	7
木もれびの森の草花	11
木もれびの森の樹木	16
木もれびの森の動物	20
木もれびの森の鳥	24
木もれびの森の虫	30
木もれびの森で見られるチョウとガ	36
木もれびの森歩き	42
あとがき	44

木もれびの森はどこにあるの？

相模大野上空から見た木もれびの森の遠景



相模原市南区の大野台、大沼、麻溝台地区に位置しています。

木もれびの森位置図

木もれびの森の標高は約 100 m～ 110 m



どうしてここに森があるのでしょうか？

今からおよそ 300 年前（江戸時代中ごろ）水もなく人の住めない荒野だった相模原台地は「相模野」と呼ばれ、人々は相模野を取り囲むように、川辺に集落を成して暮らしていました。



境川

相模川

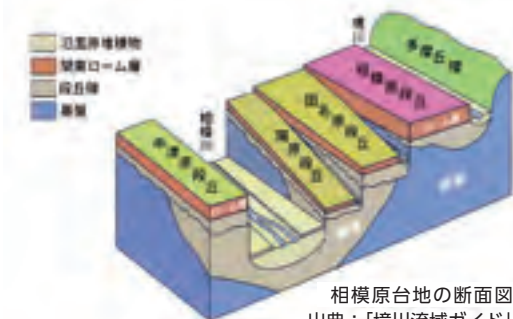
相模野周辺 36ヶ村入会絵図 元禄 12 年（1699 年頃） 出典：「相模原 - その開発と変貌 -」

相模野は 10 の「野」に分けられ、それぞれの村の人々に「秣場（まぐさば）」として萱（かや）や田畑の肥料にする落ち葉、牛馬の飼料にする草を刈る所として利用され、管理されていました。秣場は、村人共有の入会地（いりあいち）であり、原則として私的な利用は認められませんでした。

不毛の台地

木もれびの森の辺りは火山灰が厚く積もっているのので、土地はやせていて、宙水のあるところ以外は井戸の深さは 30 m もありました。

※宙水：地表から 10 m 以下の浅い地下水



相模原台地の断面図
出典：「境川流域ガイド」

開発・開墾

江戸時代には大きな新田開発（開墾）がいくつかあり、明治以降も開発は続き、村の共有地だった相模野は細分化され、次第に個人の私有地となり人々の手に渡っていきました。

やせた台地

相模野の台地は水の便も悪く、土地がやせていたため農作物があまり育たず、代わって現金収入の手段として、クヌギ、コナラの植林を行い15～20年で伐採し、土窯を作り炭焼きを行いました。

また地元ではこのような平地林を「ヤマ」と呼んでいました。

雑木林

かつての雑木林はよく管理されていて、冬には落ち葉かきが行われ堆肥に、伐採されたクヌギやコナラは薪や炭の原料になりました。



清新付近の雑木林（冬）昭和20年代
出典：「相模原 - その開発と変貌 -」

炭焼き

炭焼きは初冬から初夏にかけての仕事として各所で行われ、日常の暖房用や養蚕の保温用に使われ、また一部では商品として出荷されていました。



大沼の炭焼きについては、郷土資料の記録映画「相模原の炭焼き」で再現されています。映画の中では、実際に炭焼き窯を造り、炭を焼いており、昭和40年頃まで大沼で行われていた炭焼きの様子をうかがい知ることができます。

出典：「相模原の炭焼き」

食糧難

太平洋戦争後は、食糧難のため開拓団が組織され相模野台地は昭和20年代まで開墾が続きクヌギ・コナラの雑木林は徐々に伐採され畑になっていきました。

森の移りかわり

燃料革命

昭和 30 年代に燃料がガスや灯油に替わり、薪や炭が使われなくなりました。落ち葉で作る肥料（堆肥）も手間のかからない化学肥料に替わり、雑木林の役割は無くなってしまいました。

森の荒廃

1967 年（昭和 42 年）及び 1971 年（昭和 46 年）に指定された相模原近郊緑地保全区域のうち、特に自然環境の良好な大沼・大野台地区に広がる 73 ha の緑地が、1973 年（昭和 48 年）に「相模原近郊緑地特別保全地区」に指定されました。これが現在の木もれびの森です。

しかし、雑木林の管理をする人はいなくなり放置林は増え続け、枝は伸び放題で生きる力の強い笹が林の中に広がり、森は荒れていきました。

森づくりのきっかけ

1984 年（昭和 59 年）頃、クスサンやヤマダカレハ等の蛾が大発生し、森中が毛虫だらけになりました。

急激な環境変化で天敵が減ると、このような現象が起きると考えられています。これらの状況をうけ、市では、木もれびの森についての取り組みを開始していくこととなります。



クスサンの成虫

木もれびの森の保全

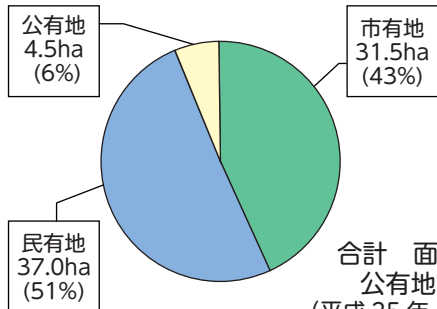
1989 年（平成元年）、相模原市は「相模原近郊緑地特別保全地区」を市民共有のみどりの財産として将来に引き継いでいくために、「木もれびの森づくり事業」として、土地所有者の理解を得て、土地を無償で借り受け樹林の管理を行うとともに、市民に広く開放することとしました。

開発をのがれた雑木林は、3つの地区に分かれてしまいましたが、73haの雑木林が残りました。

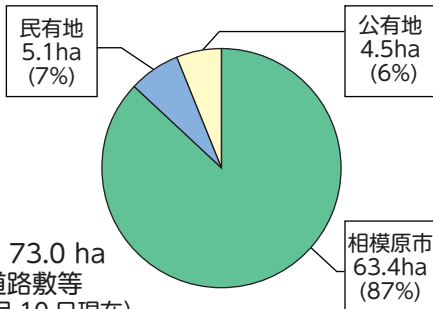


土地所有者と相模原市で貸借契約が結ばれた土地は、市が管理し、ボランティア団体や地域住民と協力しながら保全を図っています。

木もれびの森の土地所有状況



木もれびの森管理状況



合計 面積：73.0 ha
 公有地：道路敷等
 (平成 25 年 10 月 10 日現在)

森を守るにはどうしたらいいのでしょうか？

木もれびの森保全・活用計画

2003年（平成15年）、将来にわたって木もれびの森の自然環境を低下させることなく保全するとともに、さらに有効に活用するために、森の保全と活用の基本的な考え方と方向を示す「木もれびの森保全・活用計画」が策定されました。

生物多様性の維持

いろいろな木々や草花、野鳥、虫たちが生息する自然豊かな森に導いていくことが求められています。

市街地にある森として

この森は放置されて50年以上経っています。手入れが行き届いていない所は、荒れた薄暗い森になっています。

このままだと暗い所でも育っていくことのできる常緑樹が増え、ますます鬱蒼とした暗い森になってしまいます。

街の中にある森は、適度に明るく安全であることが大切です。



落ち葉遊び

森林療法

木もれびの森は、子どもたちの環境学習や市民の憩いの場としても活用されています。より多くの皆さんに末永く親しまれる森にしたいと願っています。

**森を将来に向けて守るには、
皆さんの協力による継続した森の保全が必要です。**

木もれびの森の保全活動

雑木林は、放っておくと高木化しササや低木が生えてきて鬱蒼とした森になってしまいます。人が手をいれなければ雑木林は維持できません。

森を守り育てる

下刈り



ササや低木を刈ります

間伐



密生した木を間引くことで、森の木の成長を助けます

散策路整備



踏みつけで地面が固くならないように、散策路を作り人が歩ける場所を制限します

落ち葉かき



土の中に眠っているタネが芽吹きます

林内整理



風倒木を片付けます



林床の整理をします

植 樹



麻溝台



西大沼

苗木を植えて森を育てます

植生調査・保護



希少植物を保護します



名前や株数を調査します

森のめぐみの活用



落ち葉を利用した堆肥作り



発生材を利用したベンチ作り



しいたけホダ木作り



顔を出した しいたけ



森のめぐみのクラフト作り



完成作品

地域とのふれあい活動

次世代の担い手育成



ジュニアボランティア



学校支援

体験参加



下刈り体験



のこぎり体験

自然観察



セミの羽化を見てみよう



植物を観察します

木もれびの森の草花

放置された森が、今やボランティア等の努力により自然の森と間違えられるほどに、豊かな森に変貌しています。人間によって呼び覚まされた自然界の力によって、多種多様の草花が森を彩ります。

群生している野草もあれば、凛として一輪咲かせる花もあり、散策する人々に憩いを与えてくれています。



シュンラン



フデリンドウ



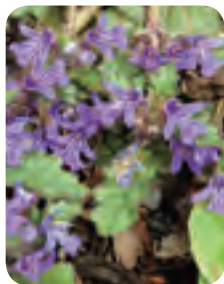
タチツボスミレ



ダイコンソウ



ホウチャクソウ



キランソウ



フタリシズカ



ヘビイチゴ



ササバギンラン



ギンラン



キンラン



イチャクソウ

春

まだ肌寒い季節、ナズナやホトケノザ、フデリンドウが枯葉の下から芽を出し、スプリング・エフェメラル（春の妖精）と呼ばれる、キクザキイチゲやニリンソウ・アマナ・ヒトリシズカが咲き始めます。

キンラン・ギンランの咲くころ、いろいろな草花の芽吹きから開花までの力強い姿が見られます。



ジュウニヒトエ



サイハイラン



オドリコソウ



ウラシマソウ



キクザキイチゲ



ミヤマナルコユリ



ニリンソウ



エビネ



アマナ

夏

キツネノカミソリが咲き始め、森はすっかり緑につつまれます。ヤマユリが森の主であるかのように咲き誇り、オオバギボウシやオカトラノオも負けじと咲き出します。



アキノタムラソウ



コバノカメメヅル



ツリガネニンジン



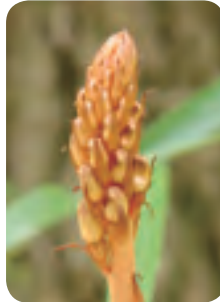
キツネノカミソリ



ヤマユリ



サラシナショウマ



オニノヤガラ



オカトラノオ



オオハンゲ



オオバギボウシ



ホタルブクロ



オオバジャーノヒゲ

秋

ヒガンバナが季節を知らせ、フジカンゾウ、ヌスビトハギ、ヤブランといった紫色の花が目につくようになります。

花びらの散った草花は、次世代のために可愛い実をつけ始めます。



ヌスビトハギ



ヤマホトトギス



フジカンゾウ



カラスノゴマ



ノダケ



ヒガンバナ



リンドウ



ヤクシソウ



シラヤマギク



ヒヨドリバナ



ツリフネソウ



キツリフネ



ヤブラン



ヒメヤブラン



ミズヒキ



クズ

冬

夏から秋にめだたないように咲いていた、トキリマメ、キチジョウソウ、オモト、ノダケ、ジャノヒゲなどの草花は、人目を誘うように果実に変身し冬の森を楽しませてくれます。



キチジョウソウ



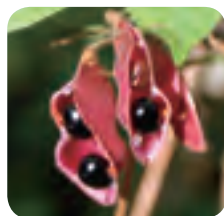
ナガバジャノヒゲ



センニンソウ



ノダケ



トキリマメ



ノブキ



ヘクソカズラ



ヤブラン



ウバユリ



カシワバハグマ



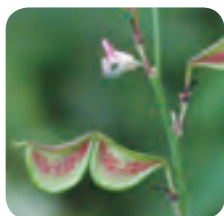
カラスウリ



アマチャヅル



ホウチャクソウ



ヌスビトハギ



フジカンゾウ



マムシグサ

木もれびの森の樹木

木もれびの森は、平成元年に「かながわの美林 50 選」に選定された首都圏有数の平地林であり、薪炭林としてコナラ・クヌギ等が植えられた森です。

スギ、ヒノキ、サワラの針葉樹林やカシ類、アオキ、シュロ等の常緑樹に遷移したエリアもある多種多様な様相の森で、高木、低木、草花は約 500 種が確認されています。

森の現状

手入れの行き届かない森

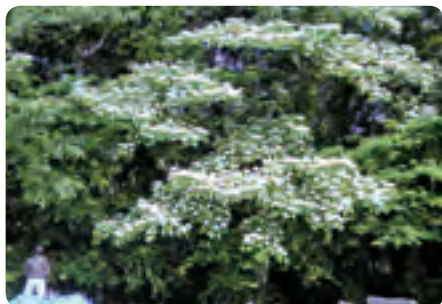


高木化したコナラ、クヌギ、ミズキ等の落葉樹林



シラカシ、シロダモ、アオキ等の常緑樹林

ミズキの森



ミズキの森は畑などが放置された後に、野鳥の糞などに混じて運ばれたミズキの種子が発芽、生育してできた樹林です。

針葉樹の森



ヒノキ、サワラ、スギの針葉樹が間伐されず密集して生育しています。

森の代表的な樹木（高木）

森の高木は 50 年以上を経過し、さまざまな太さの樹木に成長しています。

コナラ



木もれびの森を代表する樹木で、薪・炭用に植えられました。ドングリは長楕円形の 1 年成です。

クヌギ



用途はコナラと同じく薪・炭やホダ木。ドングリは球形で翌年の秋に熟す 2 年成です。

イヌシデ



樹皮は灰白色で滑らか。イヌシデ広場のシンボルツリーは樹齢 200 年以上とされています。

コブシ



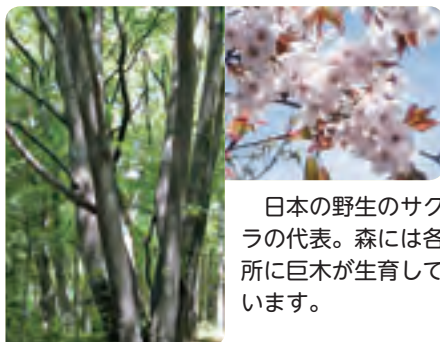
早春の頃、葉に先立ち白い 6 弁の花が咲きます。樹名は果実が握りこぶしに似ていることによります。

ムクノキ



樹皮は白っぽく滑らかで、基部は板根状に広がります。葉の表面はザラザラしています。

ヤマザクラ



日本の野生のサクラの代表。森には各所に巨木が生育しています。

エノキ



昔、魔徐けや一里塚などに植えられた落葉樹で、森の周辺部に見られます。

エゴノキ



落葉小高木、樹皮は黒っぽく滑らか。5～6月、ベルのような形の花が枝から下向きに鈴なりに咲きます。

森の代表的な樹木（低木）

ゴズイ



森の雑木林に生えている。花は目立たないが、果実は9～10月に鮮やかな赤に熟し、黒い種子が現れます。

マユミ



枝に弾力があってよくしなり、昔は弓に利用したことが名前の由来。果実はピンク色に熟し、4つに割れて種子がぶら下がります。

ムラサキシキブ



花期は6～7月で花は紅紫色。果実は熟すと赤紫色になります。

ウグイスカグラ



ウグイスが鳴く頃に花が咲くのでこの名があります。

ガマズミ



花は白色、果実は赤色でおいしく、野鳥も大好物です。

コゴメウツギ



花は黄色がかった白色で5月頃に咲きます。お米のように小さいことから名がついています。

その他主な樹木

(高木) ケヤキ、ウワミズザクラ、イヌザクラ、アカマツ、クロマツ、カツラ、ハリギリ、アカメガシワ

(低木) ヒメコウゾ、ヤマコウバシ、サウフタギ、サンショウ、ニシキギ、アブラチャン、クサギ

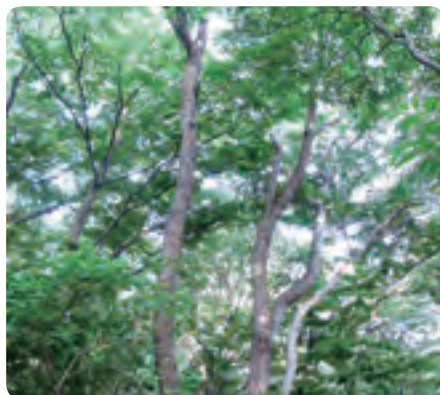
森の珍しい樹木

ミズメ



(別名ヨグソミネバリ) カバノキ科の稀少樹です。樹皮は暗灰色で、横に長い皮目があり、サクラの樹皮に似ています。

ケンポナシ



樹皮は暗い灰色で縦に裂け目が入ります。ナシとつくのは大きくなった果柄がナシのような甘みがあり、食べられるから。

木もれびの森の動物

哺乳類



アズマモグラ (モグラ科)

モグラ塚の土をそっとどかしてみると、モグラのトンネルが現れます。木もれびの森では全域に生息していますが、相模原中央緑地芝生広場周辺の明るい林内などでモグラ塚が多く見られます。



モグラ塚

地中にトンネルを掘って生活しています。トンネルを掘る時に出た土を、地上に吹き出した跡がモグラ塚です。



アカネズミ (ネズミ科)

森のネズミで、下草の多い場所を好みます。地上を動き回って生活しますが、地中に短いトンネルを掘ってその中で子育てをすることもあります。木もれびの森では全域に生息しています。ドブネズミなどの家ネズミと違い、家の中に入りこむことはありません。



タヌキ（イヌ科）

も強いので、人やイヌなどが近づくとすぐに隠れてしまいます。

主に夜行性なのであまり人目につきませんが、相模原市内ではほぼ全域に生息しています。雑食性で、昆虫など小動物や植物の種子、果実、人家のまわりでは生ゴミなど、さまざまなものを食べています。市街地では排水路などを伝って移動することが多く、木もれびの森では下草の茂った林内を中心に生息しています。晴れて暖かい日は昼間も行動しますが、警戒心がとて



ハクビシン（ジャコウネコ科）

もれびの森のように木の多い場所を特に好みます。

明治時代頃に持ち込まれて野外に広がった外来種とされていますが、詳しいことはわかっていません。木もれびの森では珍しい動物ではありませんが、夜行性のため、人目につくことはほとんどありません。食べ物や習性はタヌキとよく似ていますが、ハクビシンは木登りが得意なので、樹上で過ごすことも多いようです。相模原市内では市街地も含めて全域に生息し、木

在来生態系の脅威 アライグマ



相模原市内では今、山間地を除くほぼ全域にアライグマが生息しています。ペットとして持ち込まれたものの、あまりにも気が荒く凶暴で人慣れしにくいため、飼いきれなくて放されたものが増えてしまったようです。

両生類や小型の爬虫類、昆虫類、果実など、さまざまなものを食べるため、農作物被害のほか、在来の生態系に対する大きな脅威として特定外来生物に指定されています。木もれびの森にも生息しているものと見られ、在来の小動物が捕食されるなどの影響が心配されます。

爬虫類



ニホントカゲ（トカゲ科）

カナヘビとよく似ていますが、体の表面に光沢があつてすべすべしているので見分けられます。春先や秋の終わり頃は、日なたぼっこをしているのをよく見かけます。

木もれびの森では全域に生息していますが、どちらかというところ遊歩道沿いの明るい場所でもよく見かけます。冬の間は冬眠します。



ニホンカナヘビ (カナヘビ科)

体のごつごつして、ニホントカゲよりも尾が少し長いのが特徴です。木もれびの森では、ニホントカゲよりもよく見かけます。柵の上や木の幹などにもよく登ります。草の中や、落ち葉をカサコソと音を立てながらすばやく動くものがいたら、たいいていニホントカゲかカナヘビです。冬の間は冬眠します。



アオダイショウ (ナミヘビ科)

何かと嫌われることが多いヘビのなかまですが、アオダイショウは無毒でおとなしいヘビです。大きくなると、1.5 m近くになります。アカネズミや鳥の卵、ヒナ、ニホントカゲやカナヘビなどを食べます。木もれびの森では全域に生息しています。冬の間は冬眠します。



シマヘビ (ナミヘビ科)

アオダイショウと比べるとちょっとスマートに見えます。気性が荒く、毒はありませんが、つかんだりするとすぐにかみついてきます。アオダイショウやシマヘビは、大人と子どもで色がだいぶ変わります。

木もれびの森の鳥

木もれびの森では1年を通して50種前後の野鳥を見ることができ、また、季節や環境によって鳥の種類や生活の違いなども観察することができます。

下草と灌木が刈られた明るい雑木林



春から夏、木々の芽吹きとともに虫たちが活動を始めます。鳥たちにとっても豊富な食べ物のある季節となり、繁殖期を迎えます。

冬、地表に落ちた草木の種子は冬鳥をはじめ多くの鳥たちの命をつなぐ大事な食糧になります。

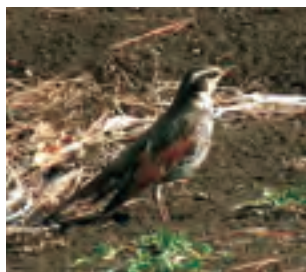


ツミの尾羽



シジウカラ (留鳥)

昆虫類や木の実、種子などを食べる。春、ツツピー、ツツピーとよくさえずる。



ツグミ (冬鳥)

北から渡ってきて越冬する。木の実も食べるが地面で落ち葉の下のミミズなどを食べる。

常緑の灌木やアズマネザサが茂った林



ウグイス

ササヤブや灌木の茂みを好む。ここでは秋から初夏まで鳴き声をよく聞くことが出来る。



冬、落葉して明るくなった林では、地面で食べ物をとるのも命がけ。茂みは安全確保のためのシェルターです。

スギ・ヒノキなどの針葉樹や常緑の樹木が多い林



アカゲラ

樹皮をつついて虫を探したり木の実などを食べる。冬季に見られる。



ヤマガラ (留鳥)

昆虫類や木の実、種子などを食べる。特にエゴノキの実は好物。



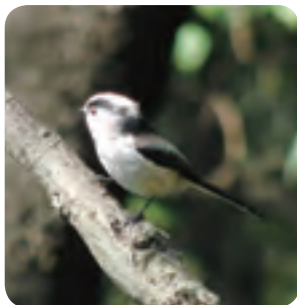
ここは天敵から身を隠すのに安全な場所であり、営巣場所としても利用されます。

1年をとおしてよく見られる鳥（留鳥）

この森周辺で生活し、繁殖活動も見られる鳥です。春に相手をつくり、巣づくり・子育て、そしてヒナの巣立ちなどいろいろな生活の場面を見せてくれます。



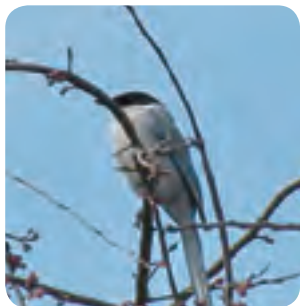
ツミ



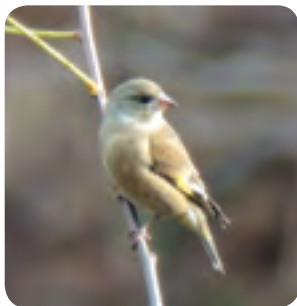
エナガ



アオゲラ



オナガ



カワラヒワ



コゲラ



コジュケイ



ムクドリ



キジバト

春と秋の渡りの途中に立ち寄る鳥（旅鳥）

南の国から繁殖のため日本に渡ってくる鳥で、この森には休息と栄養補給のために春と秋に立ち寄るのが見られます。



キビタキ



センダイムシクイ



エゾムシクイ



オオルリ

バードウォッチングのヒント

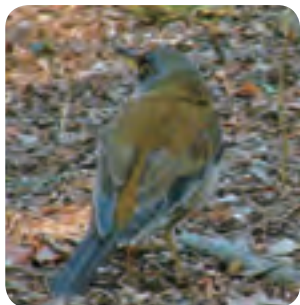
春は繁殖の季節。オスはけん命にさえずりメスに求愛をしたり、イモムシのプレゼントをする姿が見られます。4・5月にはさえずりの美しいオオルリやキビタキの立ち寄りに出会うことも。

初夏。巣作り、抱卵、ヒナへの食べ物運び。くちばしに何かくわえていたら、子育て進行中。

秋から冬。シジュウカラ・メジロ・コゲラ・エナガと一緒に群れ（混群）をつくっての生活。越冬に来た冬鳥たちも仲間入り、地面に降りて食べ物を探す場面に出会えます。そっと見守ってください。

越冬のため、渡ってくる鳥（冬鳥）

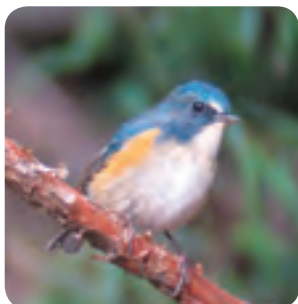
北国や高山などから渡りをしてくる鳥で、この森で冬を過ごします。草木の種子や落ち葉の下の生き物、常緑の木々にいる虫などを食べます。



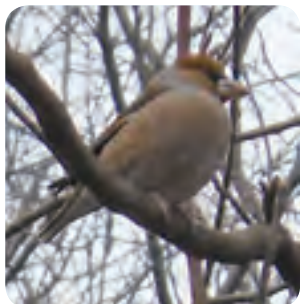
シロハラ



アオジ



ルリビタキ



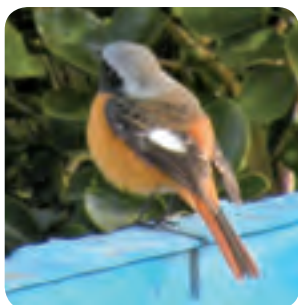
シメ



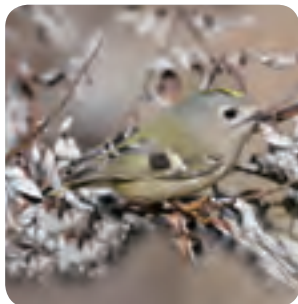
アカハラ



イカル



ジョウビタキ



キクイタダキ

森の恵みと鳥

鳥が運ぶ種子

樹木や草の果実は、ヒヨドリをはじめ多くの鳥たちによって食べられ、別の場所で未消化の種子が糞と一緒に排泄されます。そして新しい土地で芽を出し成長し、森づくりの一端を担っています。



ヒヨドリ (留鳥)

「ピーヨ ピーヨ」と鳴く、ぼさぼさ頭の灰色の鳥。



メジロ (留鳥)

眼のまわりの白い輪が目立つ。花蜜が好き、受粉作業のお手伝い。

秋はバードレストラン

秋はムクノキをはじめエノキ、ミズキ、エゴノキ、ガマズミなど、たくさんの熟した木の実に鳥が集まり、まるでバードレストランです。渡ってきたばかりの鳥にとっては命をつなぐ何よりのごちそうです。



モズ

秋から初夏まで見かける。虫や小動物、小鳥なども食べる。くちばしがタカのように鋭い。



モズのはやにえ (カナヘビ)

木もれびの森の虫

虫のいるところ

都市の中のにこされた奇跡の森“木もれびの森”は、昆虫をはじめとするさまざまな虫たちの貴重なすみかとなっています。樹木の高い場所や地面に近い場所、日なたや日かげなど、場所によって見られる虫の種類は変化します。



- 林冠 (りんかん)**：太陽光線を直接に受ける高木の枝葉が茂る部分。木もれびの森では、地上から約 20 メートルの高さにあります。
- 林内 (りんない)**：森林の内部のこと。樹木の種類や混みぐあいによって明るさが違います。
- 朽木 (くちき)**：枯れた木や倒れた木が、菌類の働きなどによって腐朽したもの。さまざまな昆虫の幼虫が朽木を食べて育ちます。
- 樹液 (じゅえき)**：カミキリムシの仲間が産卵のために樹皮につけたキズや、ボクトウガというガの幼虫がエサの昆虫をおびき寄せるためにあけた穴から少しずつしみ出します。
- 林縁 (りんえん)**：森林の縁のこと。林の中に比べて光がよく差し込むので、草やツル性植物がよく育ちます。
- 林床 (りんしょう)**：森林の地表面付近のこと。場所によって草や落ち葉で覆われていたり、地面がむき出しになっていたりします。

林冠や樹上にいる虫



5～10月

アカスジキンカメムシ

ミズキの葉やスギの球果(きゅうか)などから吸汁する。



8～11月

アオマツムシ

木のこずえからリーと鳴き声だけが聞こえる。



6～9月

ヤマトタマムシ

エノキのこずえ近くを飛ぶので目につきにくい。

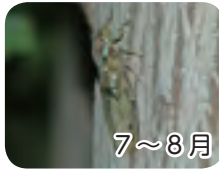
林内で見られる虫 (1)



7～9月

ミンミンゼミ

♪: ミーン、ミンミン、ミン、ミン…



7～8月

ヒグラシ

♪: カナ、カナ、カナ、カナ…



8～10月

ツクツクボウシ

♪: オーシー、ツクツク、オーシー…



7～9月

アブラゼミ

♪: ジー、ジリジリ、ジリ…



8～10月

クツワムシ

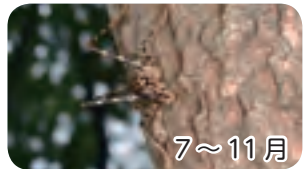
♪: ガチャ、ガチャ、ガチャ、ガチャ…



7～10月

ハヤシノウマオイ

♪: スイッチョン、スイッチョン…



7～11月

マダラカマドウマ

夜行性で樹液に集まる。昼は木のうろ等にいる。



8～10月

サトクダマキモドキ

声はかすかによく聞き取れない。チッチッチ…



8～12月

ニホントビナナフシ

約5cm。木の葉や樹木の幹でじっとしている。



8～11月

ナナフシ

8～10cm。枝に化ける森の忍者。緑色型もいる。

林内で見られる虫 (2)



5～8月

シロスジカミキリ

幼虫はコナラ等の若木を食害する。最近は少ない。



4～10月

イチモンジカメノコハムシ

成虫も幼虫もムラサキシキブの葉上で見つかる。



4～6月

エゴツルクビオトシブミ

エゴノキの葉でゆりかごを作る。メスは首が短い。



5～10月

オオゾウムシ

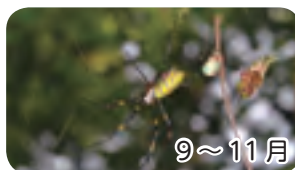
3 cm近くある大型ゾウムシ。樹液に来る。



8～9月

ハイイロチョッキリ

ドングリのついたナラ類の枝をチョキンと落とす。



9～11月

ジョロウグモ

秋の林内でよく目につく。昆虫を捕食する。

樹液に集まる虫



6～8月

カブトムシ

木もれびの森の一番人気。夜の森に行くと出会える。



7～8月

ノコギリクワガタ

写真は小歯型のオス。コクワガタよりも少ない。



6～10月

コクワガタ

幼虫はいろいろな樹木の朽木を食べて育つ。



7～8月

カナブン

近い仲間にアオカナブンとクロカナブンがいる。



5～10月

ヨツボシケシキスイ

7～14 mmの小さな甲虫。樹皮の隙間などにいる。



5～11月

スズメバチの仲間

上2頭オオスズメバチ、下はコガタスズメバチ。

朽木やそのまわりで見られる虫



5～8月

ナガゴマフカミキリ

12～20mm。広葉樹の枯枝や朽木に集まる。



5～9月

キマワリ

16～20mm。朽木上や樹木の幹を歩きまわる。



4～10月

オオクチキムシ

14～16mm。朽木や枯れ木の上を這い回る。



4～10月

マクラギヤスデ

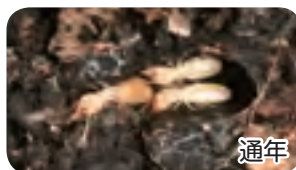
倒木を起こすと、数匹でかたまっている。



4～10月

ババヤスデ属の一種

朽木の下にいる。ヤスデは腐植を食べる分解者。



通年

ヤマトシロアリ

湿った朽木の中にトンネルを作り集団で暮らす。

林床で見られる虫



7～8月

トウキョウヒメハンミョウ

約1cm。素早い動きで小昆虫を捕らえ食べる。



4～10月

アオオサムシ

木もれびの森にはクロナガオサムシもいるが少ない。



5～10月

オオアトキリアオゴムシ

地表を歩き回り、ガの幼虫などを捕食する。



5～11月

オオヒラタシテムシ

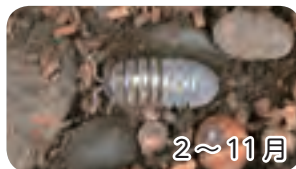
小動物の死骸を食べる森の掃除屋さん。



8～11月

ハラオカメコオロギ

♪：リリリリッ、
リリリリッ…



2～11月

オカダンゴムシ

落ち葉や小動物の死骸を食べる分解者。帰化種。

林縁で見られる虫



8～11月

アオバハゴロモ

クズなどの植物の茎から吸汁する。集団を作る。



7～11月

ベッコウハゴロモ

アオバハゴロモと同じ場所で見られる。



3～11月

ツマグロオオヨコバイ

通称“バナナムシ”。成虫で冬越しをする。



8～11月

オオカマキリ

褐色型（写真）と緑色型がある。



8～11月

ハラビロカマキリ

オオカマキリより幅広く翅（はね）に楕円の黄紋がある。



9～11月

セスジツユムシ

♪：チキー、チキー…。約35mm。写真はメス。



7～10月

ヤブキリ

♪：シュリリリリ…。35～40mm。写真はメス。



5～10月

マメコガネ

いろいろな植物に集まり、集団で葉を食べる。



6～7月

アカハナカミキリ

山地に多い種だが、木もれびの森にも生息。花に来る。



7～9月

ヨツスジトラカミキリ

姿や動きがハチに似る。林縁に咲く花に来る。



5～11月

キアシナガバチ

21～26mmの大型種。刺されるととても痛い。



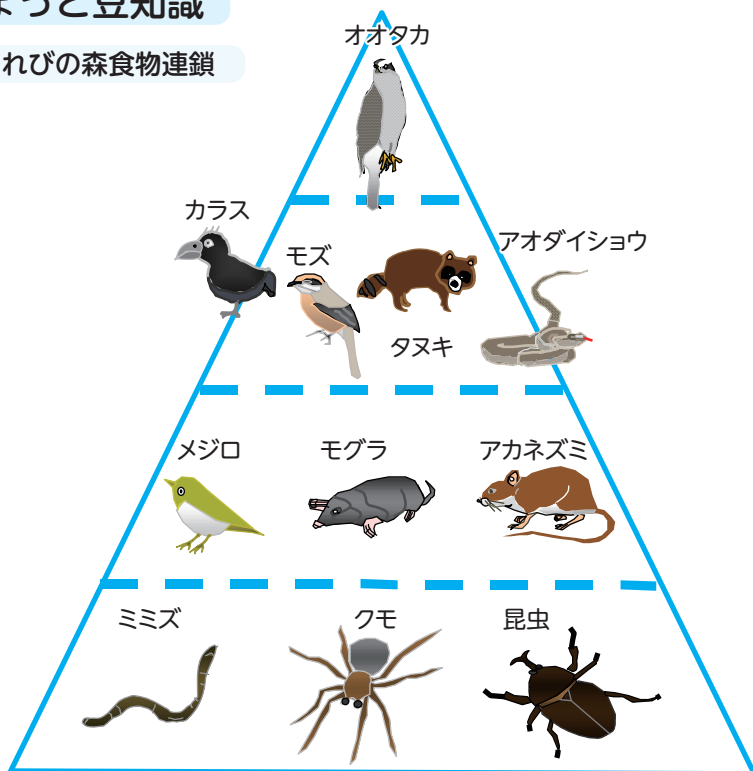
6～9月

シオヤアブ

飛んでいる昆虫を捕らえて、こぶら口吻で体液を吸う。

ちょっと豆知識

木もれびの森食物連鎖



森の散策路を歩いていると、あちこちで生きるための戦いの跡が見られます。木もれびの森においては、上の図のようにオオタカなどの猛禽類が頂点となり、「食う者」と「食われる者」による複雑な食物連鎖が成立しています。植物や微生物なども含めた豊かな生態系が、木もれびの森の美しい自然を形づくっているのです。



カブトムシの残骸



クモがアリを捕獲



セミの死骸に群がる
オオヒラタシデムシ

木もれびの森で見られるチョウとガ

木もれびの森には、低地の森林をすみかとする多くのチョウやガが暮らしています。ここではそのうちの代表的な 30 種類を紹介します。

ところで皆さんは、チョウやガの幼虫であるイモムシやケムシが、種類ごとに決まった植物を食べて育つのご存知ですか。チョウやガの種類数が多いということは、植物をはじめとする生物全体の多様性が高いことを意味します。つまりチョウやガは、森の豊かさを示すバロメーター。

皆さんもぜひ、名前や特徴を覚えて、木もれびの森をモニタリングしてみてください。

樹上でみられる種類



大野台

クロアゲハ (5月上旬～10月中旬)

木もれびの森でよく見かける黒いアゲハといえばこのチョウ。薄暗い林の中に一定のコースをつくり、次々に飛んでくる。林内のカラスザンショウによく幼虫が見られる。



麻溝台

モンキアゲハ (5月上旬～10月中旬)

クロアゲハとは、後翅こうしに白色の大きな紋を持つことで区別はやさしい。もともと海岸沿いの温暖な地域に多いチョウだが、近年は木もれびの森でも多くみかける。



大野台

ゴマダラチョウ (5月中旬～10月上旬)

オスは、道路や広場に面したエノキの大木の梢付近をすばやく飛び回り、他のオスを激しく追いかける。腐った果物や樹液に集まることもある。



大野台

ヒオドシチョウ (3月下旬～6月下旬)

成虫で冬を越したメスは春先に産卵する。幼虫はエノキの若葉を食べ5月半ばには蛹さなぎになる。5月下旬に羽化した新成虫は、約1ヶ月活動した後休眠し、翌春まで生き延びる。



大野台

ウラゴマダラシジミ (5月下旬)

幼虫が食べるイボタは、明るく透けた林を好む半落葉性低木。一時は森が放置され林内が暗くなり、木もチョウも減った。午後4時過ぎに木々を縫うようにして飛び回る。



西大沼

ミスイロオナガシジミ (6月上旬)

幼虫はコナラやクヌギの若葉を食べて育つ。早朝や風の強い日は、下草に止まってじっとしているが、普段は木の上にいるので目につかない。



西大沼

アカシジミ (5月下旬)

幼虫はコナラの若葉を食べて成長する。午後4時30分頃から日没にかけて、木の高いところを活発に飛び回る。林の近くにクリ畑があると、花の蜜を吸いにやってくる。



西大沼

ウラナミアカシジミ (6月上旬)

幼虫はクヌギの若い木の新芽や若葉を食べて育つ。飛んでいる時は、アカシジミによく似るが、時期は少し遅れる。木もれびの森では見られる場所が限られる珍しい種類。



大野台

オオミドリシジミ (6月上旬)

コナラの多い林に発生する。やや明るめの森を好むため、2000年以前に比べて、だいぶ見かける数が減った。オスの翅の表はメタリックグリーンに輝く。



西大沼

ムラサキシジミ (3月~12月)

主にシラカシやコナラで発生。暖地性の種類で、1980年代には、この地域では珍しいチョウだったが、現在は普通にみかける。シラカシやシロダモが生えるやや暗い森を好む。

木もれびの森から姿を消したチョウ

ホンバセセリは、明るい雑木林の林内や林縁で、7月頃にみられるセセリチョウの仲間。1990年頃までは、麻溝台や西大沼、東大沼などで確実に姿を見ることができました。しかし、残念ながら2000年以降の記録はありません。

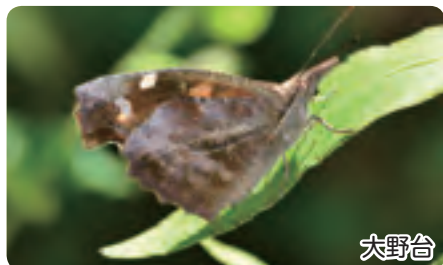
どうやら、樹木の高木化や過密化により、林床に十分な日照が届かなくなり、幼虫のエサであるススキが、生息地から絶えてしまったことが原因のようです。

以前このチョウがたくさんいた場所を通りかかると、胸が痛みます。



ホンバセセリ（麻溝台産）

地表付近や樹液などでみられる種類



大野台

テングチョウ [3～4月・6～7月]

頭の先が天狗の鼻のように長く突き出ることからこの名がついた。成虫で冬越しするため、冬でも暖かい日には姿を見せる。6～7月頃に特に姿が多い。エノキで発生する。



大野台

イチモンジチョウ [5月中旬～10月初旬]

林の小道を歩くとフワリとこのチョウが飛び立つ。驚くと舞い上がってすーっと遠くへ行ってしまう。幼虫は地面近くに生えるツル性植物のスイカズラを食べて成長する。



西大沼

ヒカゲチョウ [6～7月・9～10月]

林の下に生えるアズマネザサを食べて育つ。散策路などでよく見かけられ、人が通るたびにさっと逃げるが、またすぐに戻ってくる。樹液にもよく集まる。



西大沼

ルリタテハ [3月初旬～10月中旬]

成虫で冬を越し、早春から活動を始める。林の開けた場所をパトロールするように飛び回り、仲間や他のチョウを追いかけは、元の場所に戻る。幼虫のエサはサルトリイバラ。



大野台

サトキマダラヒカゲ (5～6月・8～9月)

林の中を活発に飛び回り、クヌギなどの樹液によく集まる。晩夏の木もれびの森では最もポピュラーなチョウ。林の下生えのアズマネザサで発生する。



西大沼

ダイミョウセセリ (6月上旬)

イチモンジチョウと同様の場所で見かける。オスは写真のように、気に入った場所に陣取り、やってくる他のオスを追い払う。幼虫のエサはオニドコロなどヤマネイモの仲間。



大野台

コチャバナセセリ (5月・7～8月)

林の開けた場所や道路沿いに見られる。幼虫はアズマネザサを食べて成長する。ササのコントロールは森林保全の基本だが、放置区域が広がると、このチョウが増える気がする。



大野台

コシロシタバ (6月上旬～10月)

チョウやハチのいなくなった夜の樹液には、シタバガの仲間が食事にやってくる。上の翅は木の皮そっくりだが、下の翅は赤・白・黄と派手な紋を装う。クヌギで発生。



大野台

マメキシタバ (6月中旬～10月)

シタバガの一種。昼間、散策路を歩くと、樹の幹からパッと飛び立ち、また別の幹にとまる。翅が樹皮と同化するので、消えたように見える。クヌギやコナラで発生する。



大野台

オニベニシタバ (6月中旬～10月)

前の2種類に比べて一回り大きく、下翅が鮮やかなピンク色をしたシタバガ。人の気配を感じると、すばやく飛び立ち、すぐ樹の幹にとまる。幼虫はクヌギの葉を食べる。

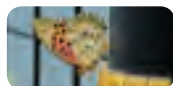
木もれびの森の新たな住人

ナガサキアゲハとツマグロヒョウモンは、1990年代の関東地方ではまれな種類でしたが、2000年以降には急速に勢力を拡大し、現在では木もれびの森でも普通にみかけるようになりました。どちらも、もともと暖かい地方にいる種類なので、暖冬の影響で冬越しのできる地域が広がったものと考えられます。

アカボシゴマダラは、1998年に藤沢市で記録されてから急速に関東全域に広がり、今では木もれびの森で最も多くみかけるチョウになりました。このチョウは、明らかに外国から持ち込まれたもので、生態系を乱す恐れのある外来種です。



ナガサキアゲハ (大野台)



ツマグロヒョウモン(大野台)



アカボシゴマダラ(麻溝台)

林縁や周囲の草地などでみられる種類



西大沼

アゲハ (4月中旬～10月中旬)

幼虫は、庭木のミカンやユズの葉を食べるので、住宅地でもよく見かける。木もれびの森では、野生のサンショウやカラスザンショウに産卵する姿を観察できる。



大野台

キタキチョウ (3月～10月下旬)

成虫で冬越しをすることから、冬でも暖かい日に飛ぶ姿がみられることがある。林の縁や開けた場所を好み、低めの位置を弱々しく飛ぶ。メドハギやネムノキがエサ。



西大沼

モンシロチョウ (3月～11月)

キャベツやダイコンなど、主に栽培されている植物で発生するため、木もれびの森でも畑に近い場所でしか見られない。タンポポやヒメジョオンなどで花の蜜を吸う。



西大沼

スズグロシロチョウ (3月～11月)

モンシロチョウによく似るが、より日陰を好むようで、林縁をフワフワ飛ぶ。幼虫はハナダイコンなどの栽培種のほか、タネツケバナやイヌガラシなどの野生種も食べる。



大野台

ウラナミシジミ (6月～11月)

このチョウは、相模原市周辺では冬越しができないため、温暖な三浦半島などから、世代を重ねながら、毎年やって来ると考えられている。幼虫はマメ科の栽培種を食べる。



西大沼

ベニシジミ (3月中旬～11月中旬)

草地や荒地が本来の住みか。木もれびの森では、林縁の草地や林に隣接する耕作地などによくみられる。スイバやギシギシなどで発生する。



中央緑地

ヤマトシジミ (4月～11月)

アゲハと同じように、住宅地などでもよく見かけるチョウ。幼虫のエサは道端の「雑草」であるカタバミ。木もれびの森では、林縁の草地や相模原中央緑地など、明るい草地にみられる。



西大沼

ルリシジミ (3月下旬～10月)

姿形の似たヤマトシジミは地面近くをゆっくり飛ぶのに対し、このチョウは林の縁や草地を上下しながら活発に飛び回る。幼虫はクズやミズキなどの花やつぼみを食べる。



西大沼

キマダラセセリ (6月・8月)

とまるときにジェット戦闘機のような独特なポーズをとる。林の縁のちょっとした草地でみられ、ノアザミやヒメジョオンなどの花で蜜を吸う。ススキやアズマネザサで発生。



西大沼

イチモンジセセリ (5月中旬～11月上旬)

セセリチョウの仲間ではもっとも目につく種類。秋になると急に数が増し、集団で移動を行う習性をもっている。幼虫はススキやエノコログサ、アズマネザサなどを食べる。

木もれびの森歩き

2 畑地かんがい用水路跡

1 相模原中央緑地



木もれびの森の核として都市公園に位置づけられた場所で、散策路・トイレなどが整備されています



今は使われなくなった農業用水路の跡

3 イヌシデ広場



森のボランティアの拠点であり散策する人たちの憩いの場

6 植樹地 (麻溝台)



グラウンド跡地にクヌギ・コナラを植樹してみんなの森と命名

大野台中央小学校



大野台公民館

大野台小学校

大野台中学校

植樹地
(西大沼)

研究施設

木もれびの森入口

双葉小学校

● バス停位置

① 古淵駅

② 大野小学校入口

③④ 大野台入口

⑤ オルガノ前



アクセス

古淵駅から相模原中央緑地	距離：約1.5km・徒歩約20分
大野台入口バス停から相模原中央緑地	距離：約1.4km・徒歩約18分
大野小学校入口バス停から相模原中央緑地	距離：約1.5km・徒歩約20分

あしがき・・奇跡の森のいま、そしてこれから・・

木もれびの森は、首都圏近郊に73haという広さで遺された奇跡の森です。人口72万人を擁する相模原市の人口密集地にあつて、これだけまとまった広さで存在し、さらに市民の憩いの場として親しまれているということが「奇跡」と呼ぶ理由です。

ひとくちに木もれびの森といっても、木々が均質に生えているわけではありません。また、いわゆる雑木林と呼ばれ、炭や薪の原料をとるために定期的な伐採を行い、下草刈りや落ち葉かきなどの手入れをしてきたような森ばかりではありません。

ある場所はスギの植林地ですし、ある場所は桑畑が放置されてできたミズキ林です。ながらく人手が入らずに、照葉樹林化している場所もあります。さらに、雑木林と言える場所も、実際には数十年以上伐採されずにいるため、正確には「雑木林の残存林」と呼ぶべきでしょう。いずれにしても、木もれびの森は人間が木々を植えて手入れをしたり、畑などに利用していた場所を放置したりしてできた二次的な植生です。

このように、木もれびの森は原生林ではありませんから、絶えず人間が管理をしていかなければ良好に維持できません。これから数百年にわたってさらに放置すれば、太古の昔にみられたような照葉樹林が復活するでしょう。しかしそれは、人間の介在を許さない自然林であり、私たちが望む木もれびの森ではありません。

この奇跡の森をどのように維持していくのか。生きている森の将来の姿をどのように描くのか。これは、私たちが地域全体で今、取り組むべき課題です。木もれびの森をもっとよく見て、理解して、この森を愛する多くの人がビジョンを共有していくことが大切ではないでしょうか。

秋山幸也（相模原市立博物館学芸員）

【参考文献】

- 「相模原市史」自然編 相模原市総務部総務課市史編纂室 2007年 5月発行
- 「相模原市史」現代図録編 相模原市総務部総務課市史編纂室 2004年 11月発行
- 「相模原 - その開発と変貌 -」相模原市立博物館 2004年 10月発行
- 「相模原の炭焼き」相模原市教育委員会 1987年 3月制作
- 「境川流域ガイド」相模原市水みどり環境課・NPO法人境川の斜面緑地を守る会
2010年 3月発行
-

(敬称略・50音順)

資料提供 相模原市・相模原市立博物館

写 真 会田幸子・青木雄司・秋山幸也・浅川長宏・一寸野虫・海野基之・
織田喜代美・相模原市立博物館・瀬尾正文・瀬尾美枝子・田崎滝雄・田中麗子・
田辺敏枝・中尾圭孜・長谷川大・森脇清司・渡部良樹

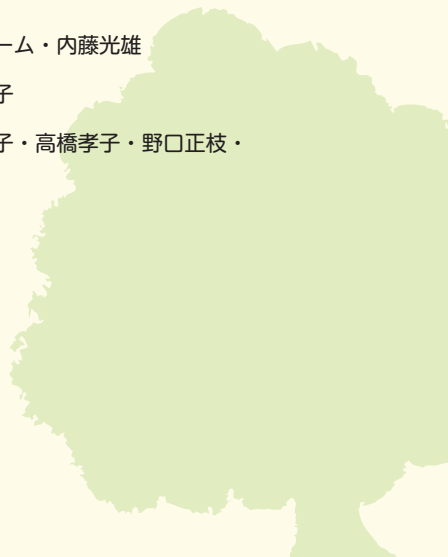
執 筆 秋山幸也・海野基之・瀬尾正文・瀬尾美枝子・高橋孝子・野口正枝・
長谷川大・林善右衛門・肥田悟

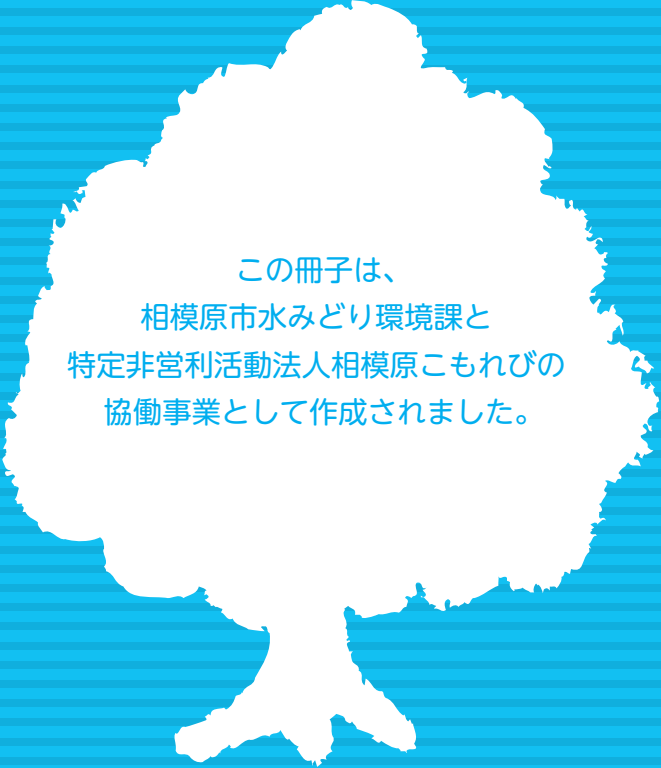
執筆協力 特定非営利活動法人相模原こもれび植生チーム・内藤光雄

イラスト 秋山幸也・海野基之・久保田瑛子・高橋孝子

編集委員 秋山幸也・海野基之・瀬尾正文・瀬尾美枝子・高橋孝子・野口正枝・
長谷川大・林善右衛門・肥田悟

事務局 海野基之・高橋孝子・肥田悟





この冊子は、
相模原市水みどり環境課と
特定非営利活動法人相模原こもれびの
協働事業として作成されました。

発行日：平成 26 年 3 月

発行：相模原市水みどり環境課 電話 042-754-1111 〒 252-5277 相模原市中央区中央 2-11-15
特定非営利活動法人相模原こもれび 電話 090-4629-4843 〒 252-0333 相模原市南区東大沼 2-2-85
ホームページ URL:<http://komorebi.bine.jp>